

瓦経片の復原試考

網 干 善 教

はじめに

平安時代に書写され、埋納された瓦経片の復原研究の一部として、現在民間に所有されている資料について、經典の同定と可能な限りの復原、さらに復原上の問題点について考察を試みようとするものである。

一

名古屋市在住の神谷達也氏が所蔵される瓦経片二点がある。

① 金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法

表面に

□ 覚眼開敷照三有

□ 請 転於无上妙法輪

□ 臨般无餘涅槃者

とあり、裏面には

〔空白〕 不捨悲願救世間

□ 盧舎那仏 〔空白〕

……… 我不失菩提心

……… □支□捨

と判読できる経文がある。これは「大唐贈開府儀同三司諡大弘教三藏沙門金剛智奉 詔訳」による『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』を書写したものと考える。ただ、この破片は表面の最終行から裏面の最初行に続く部分であるので表裏共に何行の書写であるかは判断できない。(この形式の瓦経は恐らく表裏共に十五行が書写されていたものと考えてよいであろう。)そこでこの経文に相当する偈文についてのみ復原することをした。

『大正新脩大藏経』(以下『大正大藏経』と略す)によると次のようになる。

〔表〕 由是献身方便故 便能示現種種身

次以己身仏海前 合掌踟躕懺諸咎

〔裏〕

無始輪迴諸有中
如仏菩薩所懺悔
又応深発歎喜心
諸仏菩薩行願中
縁覚声聞及有情
復観諸仏坐道樹
一切世燈坐道場
我皆胡跪先勸請
又皆勸請諸世尊
所有如来三界主

身口意業所生罪
我今陳懺亦如是
隨喜一切福智聚
金剛三業所生福
所集善根尽隨喜
己身各請転法輪
覺眼開敷照三有
転於無上妙法輪
不般涅槃恒住世
臨般無余涅槃者

.....盧舎那仏

懺悔隨喜勸請福
諸仏菩薩妙衆中
離於八難生無難
遠離愚迷具悲智
富樂豊饒生勝族
四無礙弁十自在
如金剛幢及普賢
行者次修三摩地
四無量心尽法界
即入普賢三昧耶
定慧和合金剛縛
纔誦本誓印真言

願我不失菩提心
常為善支不厭捨
宿命住智相敵身
悉能滿足波羅蜜
眷属広多恒熾盛
六通諸禅悉円満
願讚廻向亦如是
脚踏端身入正受
修習運用如法教
体同薩埵金剛故
忍願二度建如幢
身処月輪同薩埵



〔裏〕



〔表〕

次にこの瓦経の復原についての問題点を挙げることにする。

第一に、瓦経の表面の終りより二行目に「転於無上妙法輪」という偈文がある。ところが『大正大藏経』によってみるとこの文は終りから三行目に相当するものであって、この間に「不般涅槃恒住世」という偈文がなければならぬ。若しこの文がなれば、ここで一行を脱していることになる。この場合最終行と対比すると一句七字だけが脱しているのではなく、「又皆勸諸諸世尊不般涅槃恒住世」の二句一行を書き漏したことになる。

第二に、裏面をみると、二行目に「……盧舎那仏」と書写された一行がある。これは「……毘盧遮那仏」のことである。そして三行目の下段に「願我不失菩提心」とあるから、『大正大藏経』にない「……毘盧舎那仏」の一行が書写されているといえる。何故ここに、「毘盧舎那仏」の仏名が挿入されたかはわからない。

第三に、瓦経の裏面三行目の下から四字目に「支」という文字がある。『大正大藏経』の脚註の記号をみて、これを示すと

支||友(宋・元・明三本、宮内省図書寮本旧宋本)とある。このことからすれば、すでに指摘した如く、この瓦経の写経の原本となったのは「宮内庁書陵部所蔵旧宋本」と同一の經典ではないと推察できる。

以上は復原過程で判明した問題点である。

なお従来から行ってきて瓦経の復原の所見からすると偈文の書写は四字一句または五字一句の場合は四句一行であること、七字一句の場合は、二句一行が原則らしいことが知られるので、この点については通例の書写型式によっているとみてよい。

次に、瓦経の大きさの復原であるが、この瓦経は偈文にあたる部分であることと、行数が不明であることから、縦、横共に正確な計測の復原はできない。ただ、一行が七字一句、二句一行であるから、ほぼ中央に経文が書写されていたと仮定すると、上段と下段の中間点から下端までの計測値が十二・二糎であるから、縦の長さはその二倍の二四・糎位であろうと推定される。

横幅については野線の幅が平均一・八糎の通例の様式であり、表裏共に十五行とし、両端各々一・三糎を加えると二九・六糎となる。

次にこの瓦経の意義について述べておく。

瓦経に書写された經典は通常「法華部」や「密教部」の經典が多い。このうち「密教部」では「秘密三経」の例は多いが、この瓦経のように『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』を写した例は知られていない。

因みに、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』は『瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』あるいは『毘盧遮那三摩地法』とも略称される密教部經典である。

經典の内容は、解説によると「金剛界毘盧遮那如來の

三摩地を修習する法を説いたもの。すなわち本尊を大日如来として、五相成身の瑜伽觀法に依つて即身成仏の要諦を説き、次に四撰及び八供養等の法を説く」とされ、

「空海は即身成仏義等に本經を引用し、即身成仏の經証としてゐる。以つて真言密教の諸經中における重要性を知るべきである」と意義づけ、「空海、円仁、惠達、円珍、宗叡等の請来に係る」經典であるとされる。

また、三藏沙門金剛智は咸亨二年（六七一）に生れ、開元二十九年（七四一）に遷化した僧で、この經典は開元十九年（七三一）から二十四年（七三六）にかけて訳出された新訳經典であることが知られている。

次にこの經典を通例の表裏共十五行、一枚計三十行の書写とすると全部を書写するのに十一枚を要する計算となる。その場合、この破片は第三枚目に相当することになる。

さらに、この瓦経の出土地に関する問題である。所有者は、購入者より聞き及ぶところ、伊勢小町塚の出土品とされる。さすれば伊勢市浦口町三丁目所在の小町塚塚の出土である可能性が高いといえる。

② 大毘盧遮那成仏神變加持經 卷第三 悉地出現品 第六

神谷達也氏所蔵のもう一片の瓦経には、表面に、

………□無所不至真言曰(空白)「
………□帝驪毘廣反一微濕囉合契幣」

………暗囉四 (以下空白) 「
とあり、裏面には

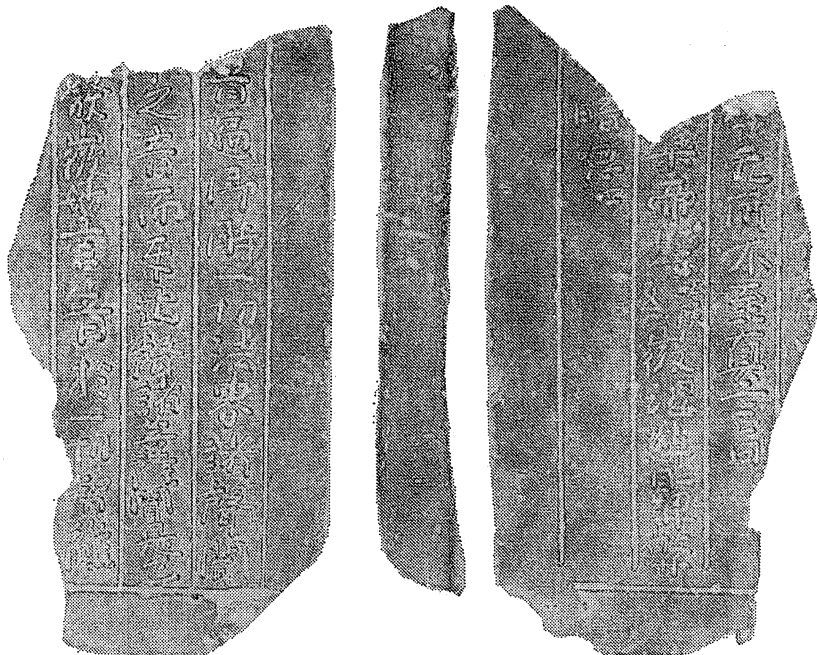
……… 普遍即時一切法界諸聲聞
……… 之音而互出聲諸菩薩聞是已」
……… 毘微妙言音於一切智離」

とあり、表裏共に三行だけが判読できる。これは「大毘盧遮那成仏神變加持經」の卷第三「悉地出現品第五」が書写された部分である。これも、表面の最終行から裏面の最初行に続くものであり、表裏共に何行の書写であるかは判らない。

そこで『大正大藏經』によつて、表面は改行の行われるところから七行分を、裏面は頌文の前までの四行について復原すると次の如くなる。

〔表〕 爾時世尊復住三世無礙力依如来加持不思議力依莊嚴清淨藏三昧即時世尊從三摩鉢底中出無眼界無尺語表依法界力無等力正等覺信解以一音声四処流出普遍一切法界与虚空等無所不至真言曰
南麼薩婆怛他引夔帝囉毘廣反一微濕囉合目契弊
毘也
反二 薩婆他三阿阿引暗囉四

〔裏〕 正等覺心從是普遍即時一切法界諸聲聞
從正等覺幪幪之音而互出聲諸菩薩聞是已
得未曾有開敷眼發微妙言音於一切智離



〔裏〕

〔表〕

熱者前而頌曰（以下略）

さて、この瓦経片について復原過程での問題点を述べることにする。

第一に、表面最終行の下から二字目は瓦経では「暗」と記している。『大正大藏経』では「闇」になっている。また、裏面一行目の十七字目の文字が、瓦経では「聞」とある。これに対して『大正大藏経』では「門」とあり、その脚註によれば「聞」とするのは、宋・元・明三本、宮内省図書寮本（現宮内庁書陵部）の旧宋本であるとする。これについては、先きにも指摘した如く、瓦経書写の原本は宮内庁書陵部本、または「乙本」よっている可能性が高いと考える。

第二に、裏面二行目が十八字書写されていて、他の行より一字多い。これは瓦経書写に往々にして見られることであるが、この破片をみても下段の方がかなり詰められて書写されている様相が認められる。この行のみ十八字にしなくとも、四行目が六字で改行になることは明白であるのに、何故字間を詰めて十八字詰にしたのであろうかという疑問がある。しかし、これはさほど重要な問題ではなく、単なる写経者の不注意によるものであろうか。

第三に、この瓦経が一行十七字詰、表裏各十五行、偈頌文は五字一句の場合、四句一行、七字一句の場合、二句一行の原則によって書写されたとするならば、

「巻第三」の第三枚目に相当することになる。

次に、この瓦経の一枚の大きさの復原であるが、縦は、裏面一行目の「遍即時一切法界諸声聞」の十字分が十二・五糎であり、この比率で一行を十五字とし、下端縁一・六糎の計測値が、上端縁と同数値であると仮定すると約二十二糎（計算上は二十一・九五糎）となる。

横幅については、前述の如く行数が不明であるため判断できないが、通例の如く表裏共に十五行とすると、罫線の幅が平均一・九糎、両端縁も各一・九糎であるから、全体としては三十二・三糎となる。厚さは一・七糎である。

一一

愛知県豊橋市美術館の所蔵になる瓦経片が一点ある。同館後藤清司氏の説明によると、「発見者はすでに他界しているが、書き遺されたものによると伊勢山田とのこと」である。この伊勢山田とは小町塚経塚の出土品でそのうちの一点であるといえる。

さて、この瓦経片は、裏面左欄外に「金剛頂経中七」とある。いうまでもなく「金剛頂経」とは『大正大蔵経』所輯によると「開府儀同三司特進試鴻臚卿肅園公食邑三千戶賜紫贈司空諡大鑿正号大広智大興善寺三蔵沙門不空」の奉詔訳である『金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経』であり、「中」とは「巻中」である。「七」

は「七枚目」ということであろうか。すでにこれだけのことが判明しておれば、問題はなさそうに思われるが、実際に復原を試みるとやはり問題がある。

先ず、瓦経をみると、表面に

……(空行) ……………

……(空行) ……………

……□□來法印從彼

とある。裏面には

……□□為一體為金剛

……□金剛摩尼寶峯樓

……□此臨陁南

とある。これを『大正大蔵経』と比較すると次のような問題がある。

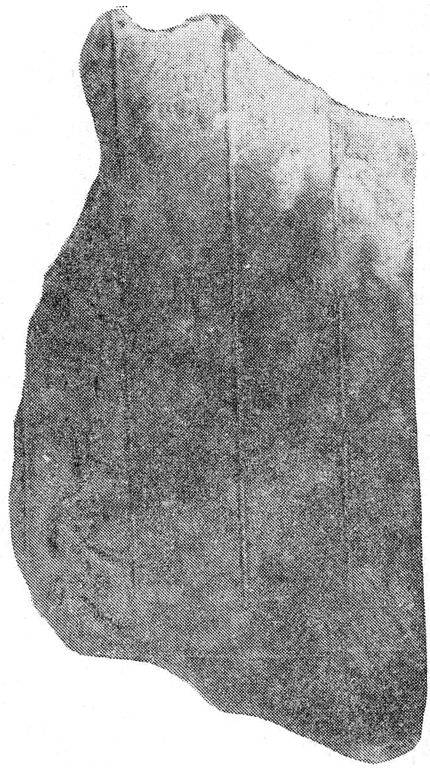
第一に裏面の「……一體為金剛……金剛摩尼寶峯樓……此臨陁南」のうち最後の「……此臨陁南」という経文は「説此臨陁南」で、これ以下改行となるのは「巻中」だけで二十六ヶ所もある。また、その一行前に「……金剛摩尼峯樓」とあり、そのさらに一行前に「……為一體為金剛」とある箇所をみると七箇所がある。

したがって裏面に相当する経文だけでは「巻中」のどの箇所であるか同定できない。

そこで、表面と思われる他面をみると、はじめ二行に文字はない。そうすると破片は下端部であるから、すべて空行か、若しくは少なくとも一行のうち下端八字分以



[裏]



[表]

上が改行のために空白となる箇所を探さなければならぬ。若し「……此唄陀南」の方が表面であると仮定すると、二十六箇所すべて、「此唄陀南」に続く経文が、五字一句、四句一偈の偈頌であるから、一行乃至二行に書写される可能性がある。ところがこの場合通例では一行であるが、一行に書写すると、一行二十字となるから、次の行に空白のできる可能性は全くない。そうすると次の可能性として二行に書写ということが考えられる。ところが、そのような可能性を考えた場合、二行の空白の次の三行目が「如來法印從彼」とならなければならないので、二十六箇すべてにあたってみると、そのような箇所は全く見られない。だとすると必然的に「……此唄陀南」の方が裏面の最終行であり、三行目に「如來法印從彼」とある位置が表面の三行目に相当するということになる。これで表裏の区別は確定する。

以上のような手続によって表裏が確定すると、表面のはじめ二行が空白になり三行目に「……如來法印從彼」とあって

改行となり、それから以下に十数行乃至二十数行後に「……為一体為金剛……金剛摩尼宝峯樓……此唄陀南」とある經文の箇所を探し、しかも「七枚目」に相当するに適した部分を検索すると、次の箇所しか考えられないということになる。以下、その同定復原を示す。

〔表〕 大天女從自心出

嚩日囉二合 覓愚以帝

從一切如來心纒出已出一切如來法印從彼

彼一切如來法印彼婆伽梵持金剛為一切

世界微塵等如來身復聚為一体為金剛歌

詠大天女依世尊觀自在王如來左辺月輪

而住說此唄陀南

奇哉成歌詠 我供諸見者 由此供養故 諸法如響応

爾時世尊毘盧遮那復入一切如來舞供養

所生名金剛三摩地一切如來族大天女從

自心出

嚩日囉二合 備哩二合 帝曳

從一切如來心纒出已出一切如來舞廣大

儀從彼出一切如來舞供養儀則彼婆伽梵

持金剛為一切世界微塵等如來身復聚為

一体為金剛舞大天女依世尊不空成就如

來左辺月輪而住說此唄陀南

奇哉広供養 作諸供養故 由金剛舞儀 安立仏供養

一切如來無上安樂悅意三昧耶

一切如來鬘一切如來諷詠一切如來無上
作供養業如是一切如來秘密供養

爾時世尊不動如來奉答毘盧遮那如來供

養故入一切如來能悅沢三昧耶所生名金

剛三摩地一切如來婢使從自心出

嚩日囉二合 杜閉

從一切如來心纒出已則彼婆伽梵持金剛

為種種儀燒香供養雲嚴飾舒遍一切金剛

界出已從彼燒香供養雲海出一切世界微

塵等如來身復聚為一体為金剛

燒香天女身依世尊金剛摩尼宝峯樓

闍隅左辺月輪而住說此唄陀南

このように『金剛頂經』「卷中」の七枚目に相当し、

前掲の諸条件に合致する部分について表裏共に十五行、

計三十行の原則にしたがって、以上の如く復原を試み

た。しかしこれには多くの問題点をもつ。經典との同定

復原の前提としては、

① 一行十七字詰、表裏各十五行、計三十行の原則によつて復原する。

② 表面二行の下端部が空白となり、三行目の下端に「……來法印從彼」とある部分を表面とする。

③ 五字一句、四句一行の原則による。

このようにみると問題は二箇所が生じる。

第一は、全体として三十一行になる。これは大きな矛

盾である。理由は表裏の行数が同一とする、どのような場合も偶数行であって、奇数になることはない。この瓦経片の場合、一行超過する。そこで考えられることは、どこかの行で文字を詰めて一行減になっている可能性があると考えられる。その場合、表面十一行目の「自心出」の場所以外は、文字数が多く一行を減ずることはできない。また偈頌が二箇所にあるが、これを五字一句、二句一行にして二行とすると、全体の割付けが合致しなくなるから、これはやはり五字一句、四句一偈一行とすべきである。若し、この間で一行詰めることができないときには、場合によっては一行の脱行があることも考えなければならぬ。いずれにしても三十一行というのは矛盾である。

第二に、一行十七字の原則を貫くと、裏面最終の文字の残存する部分が不揃いになる。すなわち、瓦経にみられる文字を忠実に復原すると

「塵等如来身復聚為一体為金剛」

「燒香天女身依世尊金剛摩尼宝峯樓」

「闍闍左辺月輪而住説此唄陀南」

となる。このようにみると十三字、十五字、十六字（下端三字分改行のため空白）となって、文字数が不揃いであると同時に一行の文字数がかなり不足する。これはこの部分だけでなく、全体に及んでくる問題である。

以上挙げたような矛盾をもつが、それは瓦経片の残存

する部分が、『金剛頂経』のなかでも、同じ経文が繰返されるところに当り、また破片が小さいことにも原因がある。しかし、復原に必要な最低限の条件をもつものであるから、辛じて経典に同定できるものである。

第三に瓦経の原形の大きさの復原である。前述の如く復原の行数にやや不確定な要素はあるが、表裏計三十一行という奇数行は考えられないから、やはり三十行とすべきであろう。そうすると、表面の野線一行の幅が一・八糎、一・九糎であり、裏面の一行が一・八糎、一・七糎であるから、平均一・八糎が十五行、それに左右縁が表裏共に一・三糎であるから、瓦経一枚の復原数値は二十九・六糎となる。

次に縦の大きさは上下縁共に一・七糎とし、表面の印從彼の四字が五・七糎であるから、十七字として推「法定すると復原二十四・七糎となる。裏面の「金剛摩尼宝峯樓」の七字が九・九糎であるから、推定二十四・六糎となる。したがって、その差は僅かであり、誤差はあまりないとみてよい。厚さは一・五糎である。

三

次の一点は鳥取県気高郡鹿野町教育委員会教育長の長岡健二氏の紹介によって実見することのできた瓦経片である。

現在の所有者は鳥取市伏野九九二在住の田中千里氏であ

り、拾得者は同所田中久秋氏という。

出土経過については、田中久秋著の『末恒村志』（大正四年十一月十七日刊）には、大正十五年、伏野字金崎の川のとおり（末恒小学校が校庭拡張工事を行ったところ）から得た。それは瓦経の破片である。確かに平安末の遺物で、仏教が趣味化した時代である。そして両面に文字が彫ってある。といった記載がある。「仏教が趣味化した時代」といった内容には問題はあるが、事実関係としてこの瓦経が、鳥取市伏野（旧気高郡末恒村）の出土であると考えてよいのではないか。

さて、この瓦経をみると、表面に

……手合掌遶□□

……□如来目不暫捨

……訶薩亦從座起

とあり、裏面に相当する経文に

……□誦持故専心

……日至三七日得

……然後得見復有

と判読できる文字がみられる。この経文は「宋元嘉年曇無蜜多於揚州訳」の『仏説観普賢菩薩行法経』であるから『大正大藏経』によって復原すると次のようになる。

〔表〕 仏説観普賢菩薩行法経

如是我聞一時仏在毘舍離国大林精舍重

閣講堂告諸比丘却後三月我当般涅槃尊



〔裏〕



〔表〕

〔裏〕

者阿難即從座起整衣服叉手合掌適仏三
匝為仏作礼胡跪合掌諦觀如來自不暫捨
長老摩訶迦葉弥勒菩薩摩訶薩亦從座起
合掌作礼瞻仰尊顏時三大士異口同音而
白仏言世尊如來滅後云何衆生起菩薩心
修行大乘方等經典正念思惟一実境界云
何不失無上菩提之心云何復当不断煩惱
不離五欲得淨諸根滅除諸罪父母所生清
淨常眼不断五欲而能得見諸障外事仏告
阿難諦聽諦聽善思念之如來昔在耆闍崛
山及余住処已広分別一実之道今於此処
為未來世諸衆生等欲行大乘無上法者欲
学普賢行普賢行者我今当説其憶念法若
見普賢及不見者除却罪数今為汝等当広
分別阿難普賢菩薩乃生東方淨妙国土其
国土相法華經中巨広分別我今於此略而
解説阿難若比丘比丘尼優婆塞優婆夷天
龍八部一切衆生誦大乘經者修大乘者発
大乘意者樂見普賢菩薩色身者樂見多宝
仏塔者樂見釈迦牟尼仏及分身諸仏者樂
得六根清淨者当学是觀此觀功德除 ①
諸障礙見上妙色不入三昧但誦持故專心
修習心心相次不離大乘一日至三七日得
見普賢有重障者七七日尽然後得見復有

重者一生得見復有重者二生得見復有重
者三生得見如是種種業報不同是故異説
普賢菩薩身量無辺音声無辺色像無辺欲

この瓦経片の復原上の問題について考察を試みる。

第一に、これは『仏説観普賢菩薩行法経』の第一枚目
に相当し、表面の第一行目は経典首題を一行に書いてい
ると考えられる。その理由は瓦経片に文字のみられる部
分が首題を入れて四行目に相当し、これに対する裏面
が、表裏共に十五行書写とすると二十七行目に相当する
から、表裏合致するという理由による。

第二に、以上のことからみて、この瓦経は一行十七字
詰、表裏共に十五行、計三十行の書写であったことがわ
かる。

第三に、この経典を一行十七字詰に割りつけて、瓦経
と対比してみると欠損部である表面七行から裏面十行
目までの間で瓦経の方が二字多くあるということにな
る。これは、どこかの箇所で二分分の重複があるのか、
あるいは改行などの理由によって生じたものかは明確で
ない。したがって本文中では、残存文字に合すために
①でもって示した。

次に、瓦経の原形復原について試みる。

まず、この瓦経には縦、横の野線はみれない。そこで
一行の幅の計測が約一糎、行と行との中心の幅が約一・
五糎であるから、これをもとに十五行で計算すると約二

十二〜二十三糶、それに両縁（数値不明）を若干加算しても幅約二十五糶程度のもので、普通の瓦経より小形である。

つぎに、縦についてであるが、表面の「如来目不暫捨」と二行目の「訶薩亦從座起」の六字及び裏面の「日至三七日得」の六字が共に五・六糶であるから、一行十七字詰で約十六糶、それに上下端の縁を若干加算しても約十七程度であるからやはり小形である。厚さも九糶で薄手である。

最後に、この地点における瓦経片の出土数が僅か一点であるという疑問も当然ある。しかし、郷土史家であり鳥取西高校の山根幸恵氏もこの場所から五輪塔や宝印塔の出土のあったことを確認されている新聞記事（日は不明）もあるから、今のところそれを信するより外はない。また倉吉市大日寺出土の瓦経にはこの型式もものは遺存していない。

以上のことから推察して、今のところ法華経の結経にあたる『仏説観普賢菩薩行法品』の破片出土地の一つに挙げておくこととする。

註

- ① 高橋順次郎編『大正新脩大藏経』第一八巻、密教部一、三二八頁、昭和三年。

- ② 網干善教「伯耆大日寺出土の瓦経について」『関西大学文

学論集』第二八巻第三号、昭和五四年。

網干善教「瓦経資料解説」『奈良県立橿原考古学研究所紀要』第三輯、昭和五四年。

- ③ 神林隆浄「金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法」小野玄妙編『仏典解説大辞典』昭和八年。

- ④ 高橋順次郎編『大正新脩大藏経』第一八巻、密教部一、一八頁、昭和三年。

- ⑤ 高橋順次郎編『大正新脩大藏経』第一八巻、密教部一、一四頁、昭和三年。

- ⑥ 高橋順次郎編『大正新脩大藏経』第九巻、法華部全・華嚴部上、三八九頁、大正一四年。

（本論文は、昭和五十四年度文部省科学研究費、一般研究C「瓦経の復原研究」による研究成果の一部である）

（二二頁より続く）

豆板銀	慶長年間	四
永樂通宝(模鑄錢)	室町時代	三〇
明治政府銅貨	明治時代	二〇
安南錢		四二
鐳錢		三七
外国(ヨーロッパ)錢		二四
判読不明錢		一四